

1. はじめに

近年、地域住民の協力を得ることはまちづくりの重要課題であるため、「地域参加型まちづくり」が多く実施されている。しかし、実際には、参加する住民は少なく、行政の一方的主張に終わることが多い¹⁾。そのため、地域づくりに対する住民の協力が求められている。

一般に、協力が実行されるためには、協力者の道德意識が鍵になる。例えば、3月11日の大震災では、被災者同士が協力し、難局を乗り越えようとしたことの背後には、日本人の高い道德観があったことが伝えられている²⁾。したがって、道德観を高めることができればまちづくりでも住民の協力を仰ぐことができると言える。その際、日本人の道德観が涵養されてきた歴史的経緯を知っておけば、道德観の向上策を検討する上で有益となる。そこで本研究では、日本人がその道德観を修得した歴史的過程を整理することを目的とする。

2. まちづくりへの協力求められる道德の定義

道德とは、社会生活を営む上で、ひとりひとりが守るべき行為の規準である³⁾。そして、協力は目的に向かって心を合わせ努力することである³⁾。このことから、社会や協力相手のために自分は何ができるのか、どのように動けばよい方向に向かうのかという考えが、協力行動が実行されるために必要な道德と考えられる。

3. 道德観の形成要因

(1) 宗教的思想の影響

道德観の形成に大きな影響を及ぼす要因として、宗教の教義や教育制度などが挙げられる。特に、神道や仏教、儒教は古来より伝えられ、日本文化の形成にも大きな影響を及ぼしてきた。無論、日本人の価値観形成もその影響は免れ得ないと考えられる。そこで、ここでは、日本における宗教的道德思想を整理する。

(2) 各思想の概要

まず、神道における道德思想について述べる。神道とは土地に根ざした神々への信仰であり、明確な教典は存在しない⁴⁾。中世以前の日本社会は、宗教的団結に基礎を置く共同体社会であったため、私利私欲を捨てて共同体全体のために奉ずることが、清き心が宿るとされ重視された。そのため、日本では古来より慈愛と社会的正義が尊重されてきた⁵⁾。したがって、神道でいうところの道德とは、社会のために苦勞を惜しまない自己犠牲の精神と言えよう。

次に、インド仏教では、出家修行者と在家信者に対しては、戒律と徳目を設けられている。特に、戒律では、①殺生をしない、②盗みをしない、③男女の間を乱さない、④嘘をつかない、⑤酒の類を飲まない、という5戒が重視されている⁵⁾。また、インド仏教では、布施(物心両面から贈り物をする)、愛語(親切な言葉をかける)、利行(相手の役に立つことをする)、同事(相手の身になって行う)という「四摂事」も勧められていた。他にも、在家信者は、慈(他者の幸福を願う心)・悲(他者の不幸と苦悩を救う心)・喜(他者の幸福を喜ぶ心)・捨(とらわれない平静の心)の「四無量心」の実践が求められた。これらの戒律・徳目を踏まえれば、仏教でいう道德とは慈愛と慈悲の心だと言える。

儒教は、東洋道德の中心的思想であり、「仁」が最高徳目とされている⁵⁾。仁とは、人間性やそれに起因する愛情を意味する。また、仁はただの慈愛ではなく、忠恕とも言い、まごころや思いやりも含む。儒教では、仁の涵養が重視されてきたことから、儒教における道德とは、まごころや思いやりの心だと考えられる。

これらの教えは、協力を得る上での必要な考えと整理できる。したがって、相手のために力を尽くす自己犠牲や、相手のことを深く考える思いやりの心、相手の幸せを願う慈愛という道德要因が日本人の協力行動の礎になっているものと推察される。

キーワード：協力行動、道德観、教育

東北工業大学建設システム工学科（仙台市太白区八木山香澄町35-1TEL022-305-3507, FAX 022-305-3501）

4. 道德教育の歴史

様々な思想は、長期に渡って教育制度に内包されることで大衆に普及し、文化となると考えられる。そこで、ここでは日本の道德教育の歴史について整理する。

(1) 第二次世界大戦前の道德教育⁶⁾

江戸時代までの教育には、道德教科が存在せず、教育内容も身分によって異なっていた⁵⁾。そのため、道德教育は、他の教科の中で行われていた。明治時代に入り、学制が施行される(1872年)と教育内容は統一され、道德教科として「修身」が設けられた。当時の修身は、子供たちに日常の行儀を教えていた。しかし、学制の理念は、当時の国情や民力から見ると、著しく高かったため、多くの批判・不満を生んだ。そこで政府は、米国の制度に倣い、新たに「教育令」を公布(1879年)した。これは自由教育令とも言われ、学区制を廃止し、小学校の設立経営を町村の自由裁量とし、義務教育を16カ月としたものだった。

自由教育令の制定過程では、道德教育の在り方に強い批判が出た。明治12年には、天皇から教学聖旨が示され、徳育の内容について提案があった。教学聖旨は道德教育重視・優先を主張し、その基礎を仁義忠孝の儒教教育に置くことを要求していた。そのため「改正教育令」(1880年)では、道德教育が重視された。その後1890年に「教育勅語」が制定され、教育理念が天皇制と結びつけられ、天皇制の永続的発展に奉仕することが国民の徳性と見なされ、そうした徳性を涵養するように教育が方向付けられた。大正時代に入ると、子供の自発性が尊重されるようになり、教育方針は現代のそれと類似したものになった。

1935年には、衆議院で「国体明徴」が決議され、「国体」、すなわち、大日本帝国が「万世一系の天皇天祖の神勅」を永遠に奉ずる神の国であると明確に認められた。これを受け、小学校は「国民学校」と名称を改め、皇国主義教育の実践場となった。国民学校における道德教育は、「国体」に関する確固とした信念を形成し、「国民精神」を涵養し、「皇国ノ使命」を自覚させることを目的としていた。

(2) 第二次世界大戦後の道德教育⁶⁾

1945年、連合軍最高司令官総司令部の使命によって、修身の授業が廃止されたが、1958年には、第三次学習指導要領において、小・中学に「道德の時間」が特設された。道德の時間は、各教科、特別教育活動および

表—1 道德教育の歴史

1871(明治4)年 7月	文部省設置
1872(明治5)年 6月	「学制」の公布
1879(明治12)年 8月	「教学聖旨」
9月	「学制」の廃止・「教育令」の発布
1880(明治13)年12月	「教育令」の改正
1890(明治23)年10月	「教育勅語」の発布
大正時代	新教育運動の展開
昭和初期	戦争政策推進のための教育
1945(昭和20)年 9月	「新日本建設の基本方針」
1946(昭和21)年 1月	「修身、国史、地理科授業停止ニ関スル件」
5月	「新教育方針」公表

学校行事等において、道德的実践の向上を目的としている。戦時中の修身は、教科書に「愛国心」や「国への奉仕」といった国中心の教育がなされていた。それに比べると、現在の「道德の時間」は基本的人権を尊重していると言える。

5. 考察

日本では、おもいやり、慈悲、慈愛、和といった宗教思想が重視されてきた。そのため、日本人の道德観の根幹に、それらが存在しており、普遍的な道德観を形成しているものと思われる。

また、道德観については、国土の地形的影響も考えられる。日本は居住面積が狭く、山間地が多いため、生きていく上で住民間の協力が不可欠だったことが、生き残る知恵として協力を是とする道德意識を涵養させたのだと考えられる。

6. 結論

本研究では、日本を例に協力行動の重要な規定因である道德意識の起源を、教育制度と宗教の教義の面から整理した。得られた知見を以下に示す。

- ・日本人の団結力の源は、神道の自己犠牲の精神、また儒教の思いやりの心だと考えられる。
- ・思いやりや慈愛の心は、儒教に焦点を置いた教育勅語以降に広まり、自己犠牲の精神は、第二次大戦中の国民学校時代に深く根付いた。

【参考文献】

- 1) 原科幸彦：市民参加と合意形成：都市と環境の計画づくり，学芸出版社，2005。
- 2) 別冊宝島編集部：世界が感嘆する日本人：海外メディアが報じた大震災後のニッポン，宝島社新書，2011。
- 3) 岩波国語辞典 第六版，岩波出版，2000。
- 4) 島蘭 進：国家神道と日本人，岩波新書，2010。
- 5) 佐藤 幸治 編著：道德 思想と教育の今日的課題 八千代出版，1999。
- 6) 中戸義雄・岡部美香：道德教育の可能性 その理論と実践，ナカニシヤ出版，2005。